変わる日本の「暮らし」と「まち」 no.45

津波を語り継ぐまちの高台から望む新しい景色

岩手県宮古市・田老地区（2015年◆平成27年）

里中高志
Satonaka Takashi
illustration：Shigeyuki Sakata

11月22日にまち開きを記念して鮭・あわびまつりが行われた宮古市田老地区。生まれ変わった田老のまちは、大きくふたつのエリアに分かれている。3・11の津波で甚大な被害を受けた旧市街地は、市街地を嵩上げして国道の位置をずらし、民家を以前よりも内陸に移動させる土地区画整理事業で、津波に対してより安全なまちとなる。そしてこれまで山林だった高台は切り開かれ、285世帯が住む新しい住宅地へと姿を変える。すでに土地の造成は完了し、新たな家々の建設を待つばかりの土台が、旧市街地を見下ろすように並んでいる。ふるさとを蘇らせる一連の事業を担ったのは、UR都市機構だ。

「新しい高台の土地は嵩上げした市街地ともつながって一体感があるし、海も見えるからグーだね」

そう話すのは、田老町の仮設商店街「たろちゃんハウス」で「ハラコ靴店」を営む腹子長一さん。靴店を営みながら山の手入れや漁も行い、さらに仮設住宅の女性に民踊やフォークダンスも教える活動派だ。震災のときは津波で商品をすべて流されながらも、避難所のホテルで急遽仕入れた学生服やジャージを被災した学生に届けた。子どもたちを泣かせたくない一心に突き動かされての行動だった。

「新しい店は嵩上げした市街地に建てることが決まってます。コンパクトなまちだけど意地があるから、すごく楽しいまちにしたいね。なにせ田老は津波がくるたびに新たな対策がされるんだから」

明治29年の明治三陸大津波、昭和8年の昭和三陸大津波、そして今回の東日本大震災と、田老はたびたび甚大な被害を被ってきた。それは悲しい歴史だが、同時に困難を乗り越えてきた歴史でもある。「万里の長城」と呼ばれた×型の旧防潮堤とは異なるアプローチの、丘型の防潮堤も現在建設されている。

「振り返ると本当にあっという間でした。一年一年、そのときには長く感じたんですけどね」

そう呟くのは、同じ「たろちゃんハウス」にある「田中菓子舗」の田中文さん。大正12年創業の同店は、いま文さんの両親と姉と弟、5人家族で営んでいる。震災の2年後には工場を新設。来年中には新しい店を建てる。渦巻き状のかりんとうと、ハート型のワッフルが名物だ。

「やっぱり待っているお客さんがいますから。いろんな方たちのご協力でここまで来ることができました」

一方で、「嘉兵衛屋商店」の山本嘉七さんは、仮設住宅の人口が減っていくなか、いつ新しいまちに店を移すべきか考えている。仮設商店街「たろちゃんハウス」を束ねるたろちゃん協同組合の箱石英夫理事長は、こう話す。

「商店は人口あってのもの。これからどうなるか不安はあります。けれど、田老は過去何度も津波を乗り越えて作られてきたまちです。昔の人にできて今の人にできないことはないはずだから、これからもいろいろな共同事業にチャレンジしていきますよ」

震災の年の9月に発足したたろちゃんハウスは、今年4月周年の感謝イベントを行った。だが、商店主にとってここはあくまで仮住まい。「5周年はないように、最後のつもりでイベントを行ったんです」と箱石さんは今後への決意を語ってくれた。

夢を持てる取り組みを

今回造成された高台の土地は、昭和8年の昭和三陸大津波後の復興計画でも、移転の計画が持ち上がったことがあった。しかし、当時の土木技術では困難なことから見送りに。80年の時を経て、その計画が蘇ったのが、現在の事業だ。

高台への移転で田老の防災はさらに強固に

さらに今回導入されたのは、調査、測量、設計及び施行を一体的にマネジメントするCM（コンストラクション・マネジメント）方式。施行者である宮古市、事業や換地の計画、設計・工事の総合調整を行うUR都市機構、そして設計・工事を担当するたろうまちづくりJV（鹿島・大日本コンサルタント共同企業体）が一体となり、事業の早期着手と円滑な事業促進を担った。高台の高さをならす盛り土には高台の切り土で発生した土を使用。余分な輸送を発生させない計画も、工期を短縮する工夫のひとつだ。UR宮古復興支援事務所市街地整備課課長の石川直樹が話す。

「宮古市さんからも、住民の方々が早く新しい住まいをイメージできる、夢を持てる取り組みを進めてほしいというご要望をいただいていましたので、平成26年2月を第一回として、昨年12月の土地の抽選会までに4度の見学会を行い、進捗状況をその都度見ていただくように心がけました。帰省したお子さんたちが親御さんの住まいを見られるように、お盆の時期にも見学会を開いています。早く新しい宅地をお見せできるように、とそのためのスケジュール管理が、いちばん心を砕いたところです」

住民側の代表の一人として田老地区土地区画整理審議会に参加し、会長を務めた田畑満三由さんは、「大変な仕事をうまくやるなあ、使命感がないと務まらないだろうな、というのがURの職員さんを見て感心したことです。地権者の方々もさまざまな思いがあったでしょうが、最後は皆さんURに感謝していましたよ」と話す。いまは新しいまち作りへ向けた話し合いが端緒についたところだ。

普通の日常が一番の楽しみ

旧田老町役場に長年勤務し、現在は時折漁に出て、うにやあわびを採る生活をしている大棒賢作さんは、田老のまちとともに生きてきた思いを込めて話す。

「やっぱりどんなことがあっても生まれ育った土地は離れたくないし、海の近くにいたいんだね。新しい高台の土地でも隣近所は皆昔からの顔なじみだから、気苦労なく暮らせるんだよ」

新しい野球場の建設もはじまった田老のまちは、震災を語り継ぐまちという役割も果たそうとしている。1、2階が鉄骨を残すのみの姿のまま佇むたろう観光ホテルは、震災の教訓を伝えるために保存計画が決まっている。宮古市田老総合事務所の地域振興担当主査・齊藤清志さんが話す。

「私はいま小学生に震災からの復興の歩みについて教えています。そのときに、こう言うんです。『震災のとき、たくさんの人から支援を受けたことを忘れないように。大人になって都会に出ても、田老が頑張っていることをそこの人たちに伝えてほしい。そして、チャンスがあったらまたこの田老のまちに戻ってきなさい』ってね」

庭いじりや洗車といった普通の日常が戻ってくるのを齊藤さんは何よりも楽しみにしている。田老のまちの新しい歴史は、いま始まったばかりだ。

街に、ルネッサンス
UR UR都市機構
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

［企画制作］新潮社